

日本性科学学会 ニュース

第21巻第3号

平成14年(2002年) 9月

発行人:野末 源一 印刷所:樹絢文社

第22回日本性科学学会のご案内

皆様奮って御来阪下さいますようご案内申し上げます。

会 期:平成14年10月20日(日) 8:50~17:30

会 場:大阪市立大学医学部学舎4階(大阪市阿倍野区旭町1-4-3)

地下鉄天王寺駅出口よりすぐ JR天王寺駅・近鉄あべの橋駅から徒歩5分

学 会 長:石河 修 大阪市立大学大学院医学研究科 女性病態医学講座教授

参 加 費:会員・一般5,000円 学生1,000円(前日JFSセミナー 一般参加者に割引あり)

メインテーマ:“セクシュアリティと女性のQOL”

特 別 講 演 「生命のスーパーシステム ―生物進化から生と性を考える―

井上正康(大阪市立大学大学院医学研究科分子病態学 教授)

座 長 石河 修(大阪市立大学大学院医学研究科女性病態医学 教授)

基 調 講 演 「性障害とセックスセラピー、そして性同一性障害」

阿部輝夫(あべメンタルクリニック院長)

座 長 山崎高明(山崎産科婦人科医院理事長・日本性科学会理事)

招 請 講 演 「セクシュアリティと女性のQOL」

遙 洋子(エッセイスト・作家)

座 長 金子和子(日本赤十字社医療センター 臨床心理士)

セ ッ シ ョ ン 「Ten-no-ji セッション(性暴力・性被害)」

甲村弘子(大阪樟蔭女子大学人間科学部 教授)

友田尋子(大阪市立大学看護短期大学部 助教授)

座 長 塚田 攻(埼玉社会保険病院精神神経科部長)

ワークショップ 「21世紀の性教育 ―今日的 content、展開と性教育技法―

座 長 武田 敏(千葉大学教育学部 名誉教授)

山中京子(大阪府立大学社会福祉学部 助教授)

ランチョンセミナー 「精神科医からみた『女の一生』

切池信夫(大阪市立大学大学院医学研究科神経精神医学 教授)

座 長 後山尚久(大阪医科大学産婦人科教室 助教授)

シンポジウム 「患者のQOLとセクシュアリティ」

座 長 大川玲子(国立千葉病院産婦人科医長)

茅島江子(東京慈恵会医科大学看護学科 教授)

後山尚久(大阪医科大学)・島 典子(新潟大学附属病院)

安本亮二(十三市民病院)・高橋 都(東京大学)・森村美奈(大阪市立大学)

事 務 局:〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3

大阪市立大学大学院医学研究科 女性病態医学講座

第22回日本性科学学会事務局 担当:森村美奈

TEL:06-6645-3862 FAX:06-6646-5800 e-mail アドレス:jsss@med.osaka-cu.ac.jp

第22回日本性科学学会/日本性科学連合 JFS セミナー 合同懇親会

日時・場所 10月19日(土) 17:30開演 大阪市立大学医学部附属病院 レストラン カメリア 会費:3,000円

詳しくは性科学学会ホームページ <http://www.kk.ij4u.or.jp/~shin-iga/jsss.html> をご覧下さい

Vol. 21

№
3

日本性科学会

〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館3F

長谷クリニック内

TEL 03(3475)1780 FAX 03(3475)1789

〔症例研究会より〕

＜ゲイ・スタディ＞が「同性愛研究」や「同性愛者治療」に与えたインパクト：

ギルバート・ハートの『同性愛のカルチャー研究』を読む

ストレスケア日比谷クリニック・土浦メンタルクリニック 黒柳俊恭

心理療法の世界において、「同性愛」の問題は、フロイト時代には既に大きなテーマとして扱われていたのであるから、現在まで相当量の研究が積み重ねられている。ところで、「同性愛」は単なる「性的オリエンテーション」の問題とかならずけられない次のような複雑な問題を含んでいる、つまりキリスト教を典型とする一部の宗教的規範からは、「悪」と考えられたり、一部の精神分析学派の立場からは「病理」と理解されてきた事情がある。他方、20世紀後半の欧米社会においては、「ゲイの社会運動」が生じて、アメリカの疾病分類から「同性愛」を削除するまでに、同性愛者の「人権」が認められるようになってきてもいるわけである。上記のような複雑な背景をもつことを考えただけでも、セラピストのなかには「同性愛」を主訴とするクライアントは苦手とたじろぐ人々も少なくないと感じる。

そこで5月の研究会では、セックス・カウンセリングの先進国である欧米の性科学者たちが、現在「同性愛」をどのように考えているのか、概観する目的で、同性愛研究の第1人者と目されるギルバート・ハートの近著、『同性愛のカルチャー研究』（現代書館、2002年）の内容をテキストとして、同性愛をめぐる論点を整理してみた。

同性愛をめぐる論点を整理すると次のようになった：

- ① homosexuality（同性愛）は近代ヨーロッパの概念に過ぎず、普遍性はないのか？
- ② 20世紀にめまぐるしく変化した同性愛者のライフスタイルとはどう言うものか？
- ③ 同性愛研究は同性愛者に委ねられたのか？（研究におけるイーミック&エティックの問題）
- ④ 同性愛をどう治療するのか、同性愛者を異性愛者にすることが「同性愛の治療」なのか？

以下、そうした「論点」を順次概説する。

- ① homosexuality（同性愛）は普遍的なものではない：

同性間の性的な関係（same sex relationship）は、それこそ古くから知られているわけだが、他方 homosexuality（現在の同性愛）の「概念」はヨーロッパ近代に生まれたものである。例えば英語の同性愛（homosexuality）は、イギリスの心理学者で性科学者のヘンリー・ハヴロック・エリス（1859～1939）が1890年代に使ったのが最初であり、比較的新しい概念である。「同性愛のカルチャー研究」の著者であるギルバート・ハートは、この点を踏まえて、homosexuality（同性愛）の代りに same-sex relation や same-gender relation を使って区別している。

さらに「同性愛」が普遍的でないことを示すために、ギルバート・ハートは自身のサンビアでの人類学的調査を紹介している。その調査によれば、サンビアでは少年を力強い戦士に改造する目的で、青年たちが少年にフェラチオさせ、自分の精液を与える儀礼を行う。青年と少年の間の儀礼は、観察者の目には明らかに青年と少年の間の同性愛的相互作用と理解されるのだが、サンビアの当事者たちは、それを「同性愛」とは毛頭考えない。サンビアには、そもそも「同性愛」を意味する言葉が存在しないからである。著者は「同性愛」が文化と深く結びついていることを例証したのである。

- ② 20世紀にめまぐるしく変化した同性愛者のライフスタイル、この変化は何を意味するのか？

欧米の社会では性的マイノリティ自身、20世紀には「隠れホモセクシュアル」的なライフスタイルを批判する形で、自分自身が性的マイノリティであることを「カムアウト」し、自らを「ゲイ」と称して他の仲間と連帯し、差別と闘ったり、人権擁護的に活動した。このようなライフスタイルをとる人々を「ゲイ」と言い、従来の「ホモセクシュアル」とは対立する事が多い。同時に当事者の学問として、「ゲイ・スタディ＝同性愛研究」を積み重ねてきている。さらに近年になって、自分自身を社会の周辺に生活する「マイノリティ」と位置付ける「ゲイ」を批判して、自らを「クイア」と称する人々が現れ、「クイア・スタディ」を開始している。彼らは欧米社会に存在する「異性愛主義」を攻撃する人々である。

- ③ 研究におけるイーミック（emic）&エティック（etic）の問題、「同性愛の研究」は同性愛者の手に移ったのか。

ところで、「ゲイ・スタディ」の成果をなぜ医療や心理面接、セックス・カウンセリングに取り入れなければならないのか、不思議に思われる治療者もいらっしゃるかも知れないが、そもそも米国精神医学会（AP A）の「精神疾患の分類と診断の手引」から同性愛が削除されたのも、ゲイの社会的運動の結果でと考えられ、精神医学や心理学における同性愛の扱いも、同性愛に関する社会的認識から無関係ではいられないのが現実である。これはご存知の方も多いが、精神科の医師でしかもゲイやレズビアンである治療者のための専門誌（Journal of Gay & Lesbian Psychotherapy: The Haworth Press, Inc.）があり、高度な同性愛研究が報告されている。このような流れを考えると、フロイト時代には同性愛研究の担手が、異性愛者かあるいは隠れホモセクシュアルである精神科医師や心理臨床家であったが、現在は寧ろゲイの当事者で同時に研究者である人々に交替したと言えるのかも知れない。

- ④ 同性愛をどう治療するのか、同性愛者を異性愛者にするのが同性愛の治療か？

以上のように20世紀に大きく変わった同性愛者のライフスタイルが、「同性愛研究」や、日本の「セックスセラピー」の現場に与えた影響を考えると、その最大のものは「同性愛」自体が治療を要する「疾病」でないと考えるようになったことである。その結果、同性愛に関して問題となるのは、同性愛者である自分を受容できないこと、つまり「内面化されたホモフォビア」を軽減することになってきているのではないだろうか。

以上、当日お話ししたことの概要をまとめた。

＜文献＞

Cabàj, R. and Stein, T. S (Ed): Textbook of Homosexuality and Mental Health. American Psychiatric Press, Inc. 1996.

Cohler, B. J.: Sexual Orientation and Psychoanalytic Study and Intervention Among Lesbians and Gay Men.

Journal of Gay & Lesbian Psychotherapy, Vol.3 (2) 35-59, 1999

Herd, G.: "Same sex, Different Cultures: Exploring Gay & Lesbian Lives" Westview Press 1997.

黒柳俊恭・塩野美奈（訳）：「同性愛のカルチャー研究」現代書館、2002.

〈書 評〉

マスターベーションの歴史 石川 弘義 著 作品社（東京）2001 年第三版発行

学校法人 平和学院看護学院 野 末 源 一

著者はマスターベーションについての文献を実証的に調べている。最初に1710年発行された著者不明の「オナニア」からはじまり、スイスの医師ティソの「オナニズム」に入る。これは1758年に発行されたもので、マスターベーションの罪を暴くために書いたのではなく、その障害について書いたものだとの副題がついている。その中にはマスターベーションのために死に至った例が絵入りで紹介されている。マスターベーションが健康に害を及ぼすと西欧社会で信じるようになった曰く付の本である。さらに性科学者として有名なクラフト・エービングの著書「変態性欲論」の紹介がある。クラフト・エービング（1840～1902）は精神医学を学び、ストラスブルグ大学、ウィーン大学の教授であった。性の目的は生殖にあり、文明の進歩は肉欲を抑えることによってもたらされるというのが彼の基本的な考え方であって、「変態性欲論」はティソの「オナニズム」にどこか似ているとしている。さてこの著書の後半ではヘンリー・ハヴェロック・エリス（1859～1939）の「性心理学」の中から、マスターベーションは精神異常の原因でなく普通の行動であるとしたエリスの言葉を引用して彼を近代心理学の開祖としている。

実際のカウンセリングのなかでマスターベーションのトピックスがよく出る。人々は18世紀のころから今に至るまで、マスターベーションについてどのように考えてきていたか、それはむしろ道徳律の要請によるものでありスケア教育そのものであった。この本を読むと、当時はマスターベーションの害悪は衰弱、発狂をも招くとしており社会もそれを心から信じていたことがよく判る。時の流れに従いながら（ただ時間のみでなく、戦争、貧困などを人類が経験しつつ）現代のようにマスターベーションを科学的に心理学的に観るようになってきた推移がよく判る。そして男女の関係も、マスターベーションも含めて心理的な距離のとり方、遠すぎると近い距離が欲しくなり、近すぎると嫌になってしまうなどカウンセリングに必要な知識（253ページ）も多く出てくる。歴史的背景や事実を頭に置きマスターベーションの考え方の変化を楽しみながら読むことが出来る。この本の中で、性科学の歴史をつくった先駆者の写真や過去にあったマスターベーションの治療器具の指図も興味深い。

カウンセラーにとって一読すべき本であろう。

データブック NHK 日本人の性行動・性意識 NHK「日本人の性」プロジェクト編、NHK 出版

国立千葉病院 大 川 玲 子

日本初の画期的調査！ 16歳から69歳までの日本人男女を対象にNHKが実施した「性に関する調査」。その全貌をおさめ、調査結果が浮き彫りにした日本社会の断面を解析する。上野千鶴子・宮台真司両氏による特別対談を収載！

これが帯の文章である。調査は1999年11月から12月に行われ、無作為抽出された3,600人を対象とし、約2,000人の有効回答を解析した。94年にアメリカで行われた調査（抜粋がセックス・イン・アメリカというタイトルで邦訳も出版された）に対応するものと言える。このデータは2000年4月、NHKのETV2000という番組で、4テーマについて発表され、日本性科学会幹事会が取材協力し、筆者がセックスレスのテーマで座談会に出演した。同年8月のアジア性科学会では、NHK放送文化研究所の牧田氏が発表したものの、出版の遅れが気になっていたが、2002年3月ようやく出版となった。調査方法や調査票の内容はもとより、結果も全項目にわたって一通り掲載されている。岩間夏樹、辻泉両氏によるていねいな解説も参考になるが、調査票作成にも加わった上野千鶴子、宮台真司の対談はさすがに興味深く、本書に楽しみの要素を付加している。

しかし何と言っても本書の価値は無作為標本からのデータである。日本人の93%は今までに、またそのうち82%はこの1年間にセックスをしている。この1年のセックス相手は、1人が86%、10人以上は1%、セックスの回数は月2、3回の27%をピークに、月1回（21%）、週1回（20%）である。など、性行動、性意識のどちらも、ほぼ順当な結果と言えば面白みは少ないが、あらためてうなずけるのも、データの重み故である。筆者もすでにいくつかの論文で引用したが、当分本書は「性科学研究における標準値」として必須文献になるはずである。セックス・イン・アメリカでは、その研究がいかに統計学的に優れ、それまでアメリカ人のセックスを代弁すると思われていたキンゼー報告がいいかげんなものか、という自我自賛の解説にうんざりする面もあったが、本書ではそのあたりはさらりと流し、むしろ人々のセックスを科学することの苦慮が語られ、好感が持てた。

会員の本の紹介

日本赤十字社医療センター 金子 和子

性：セクシュアリティの看護 松本清一監修 高村寿子編著 大井けい子・大川洋子・鍛治良実・神山幸枝・茅島江子・久保田君枝・濱松加寸子・番内和枝・東 優子・松井美穂・松本清一・渡辺純一 建帛社 B5判 166頁 2,200円

医療の中では、看護の世界が一番性への取り組みが盛んだといわれます。そのため、心理士である私は、看護者用のセクシュアリティに関する教科書は多数出版されているのだと誤解していました。今回、他のものと比べようと、調べましたが、セクシュアリティを正面から取り上げた日本のものは、「看護と性」(川野雅資・武田敏著)だけでありこの著者も日本性科学会の会員でした。

この本の嬉しい点は二つあります。第一には、性を基本的人権の一つととらえ多様性を認めていることです。私が教えている学校で使用されている教科書「助産学大系2：人間の性・生殖」(日本看護協会出版会)に疑問を抱いていました。それは、性を、同性愛を性倒錯ととらえ、近親相姦と同じレベルでのべたり、性モラルを論じるのに「民族の繁栄」という言葉が出てきたりします。性を看護者が学ぶのはよりよい看護ができるためですので、性をどのような視点で捕らえるかがとても大切です。第2には事例が多いことです。基礎知識と最新情報をもりこみながら、実際の臨床場面でそれをどのように生かすかを事例を通して体得できるように工夫してあります。看護者でなくても大変参考になる一冊です。

第7回アジア性科学会のお知らせ

開催地：ラッフルズ市会議センター シンガポール

会 期：2002年11月14日～17日

アジア性科学会会長：松本 清一

学会長：PG Adaikan (シンガポール大学産婦人科)

共 催：ISSR (国際インポテンス学会)

登録費：650\$ (S)

公用語：英語 発表抄録は閉切られました

お問い合わせ NICS (日本性科学情報センター 03-5842-8660) 又は <http://www.7acs.com>

第16回世界性科学会のお知らせ

16th World Congress of Sexology / XVI Congreso Mundial de Sexologia

メインテーマ：セクシュアリティと人類の発展 —議論から行動へ—

開催地：国際会議場 ハバナ (キューバ)

会 期：2003年3月10日～14日

WAS 会長：Marc. Ganem

学会長：Mariela Castro Espin

公用語：英語 (英語／スペイン語には同時通訳あり)

登録費：10月まで300\$ (US), 12月まで400\$, 以後500\$

抄録その他、詳細は <http://www.cubasexologia.com> 又は NICS へ

NICS (日本性科学情報センター 03-5842-8660) で、学会ツアーを企画します。

第23回日本性科学学会の予告

開催日：2003年10月19日 (日)

場 所：東京都内 (未定)

学会長：原科 孝雄 (埼玉医科大学総合医療センター形成外科教授)